

茶の湯銘事典 一(あゝお)

【あうしゆくばい】 鶯宿梅 オウシユクバイ

① 『大鏡』第六に所載の故事の題名。あるいは、この故事の梅の木の名をいう。清涼殿前の梅の木が枯れたため、新たな梅の木を探していた村上天皇は、ある館にみごとな木があることを知り、勅命により移植しようと思いました。館の主(紀貫之の娘 紀内侍)は「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ」(帝の命であれば従いましょう。しかし鶯が宿は何処と尋ねたら何と答えればよいのでしょうか)という歌を短冊に記し梅の枝に提げて献上した。天皇はこの歌を読み感じ入って梅の木を返したという。『十訓抄』第七にも類似の話がある。

② 鶯と梅を組み合わせた画題。①の故事になぞらえそう呼ぶ。

③ 梅の品種名。

季 ①②春 ③無季

連・鶯・梅の宿

文・この天暦の御時に、清涼殿御前の梅の木の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、(中略)一京まかりありきしかども、侍らざりしに、西の京のそこそこなる家に、色濃く咲きたる木の様態美しきが侍りしを、掘り取りしかば、家主の、「木に、これ結ひ付けて持て参れ」と言はせたまひしかば、

(中略)

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいかが答へむ

とありけるに、怪しくおぼしめして、「何者の家ぞ」と尋ねさせたまひければ、貫之の主の御娘の住む所なりけり。「遺恨のわざをもしたりけるかな」とて、甘えおはしましける。

『大鏡』第六より

曲・いやさやうには言ふべからず 梅の名は好文木 または鶯宿梅などこそ申すべけれ 知らぬ人の申せばとて用ゐ給ふべからず 『東北』より

補 「ホーホケキヨ」の美声で知られる鶯はヒタキ科ウグイス亜科の鳥。冬には高地の鶯も平地へ下りてくる。その頃の鶯は鳴き方も下手だが、梅の咲く

頃には上手に鳴くようになる。四月・五月には山に帰る。この頃の声の張りがなくなった鶯を老いの鶯といい、夏の季語となる。鶯はすでに『万葉集』に梅と合わせて詠まれているが梅に限らず柳・山吹・萩・竹などを背景として詠んだ歌も多くみられる。平安時代に入り梅と合わせて詠むことが多くなり、『大鏡』の故事は梅と鶯を決定的に結びつけることとなる。先載の「勅なれば：」の歌は『拾遺集』にもあるが詞書によれば読み人は「家女主」とあり梅は紅梅である。『十訓抄』第七では鶯の巢のある梅の木であるという。梅と鶯の組み合わせた絵は大和絵史上現代に至るまで極めて多くの作例がある。〈鶯宿梅〉は最も多く描き続けられた画題のひとつといえよう。春の到来の喜びが溢れ、色彩、歌心の効いた銘である。『拾遺集』平兼盛「我が宿の梅の立ち枝や見えつらむ思ひの外に君が来ませる」とあるように「梅の宿」とは梅のある庭という意味であるが、『十訓抄』の鶯の宿を連想させる。

【あかし】明石 アカシ

① 播磨の国の歌枕。現在の兵庫県明石市の海岸付近に当たる。更級・広沢の池などと並ぶ月の名所。

② 紫式部『源氏物語』卷十三の卷名。光源氏二十七歳三月から二十八歳八月まで。都を下り光源氏は須磨、さらに明石へと移る。そこで出会った明石君と契を結ぶ。やがて都から召還の宣旨が下り源氏は身ごもった明石君を残し再会を誓い帰京する。

季 ①無季 秋 ②無季

類・明石の泊・…の浜・…の門・…の沖・…の浦・…の潟

連・朝霧・千鳥・苦屋・月

文・何人ならむと問へば、明石の浦より、前の守新発意の、御舟よそひてまいるる也。源少納言さぶらひ給はば、対面して、事の心執り申さんと云ふ。

『源氏物語』明石より

歌・天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

『万葉集』柿本人麻呂

・ほのぼのと明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしぞ思ふ

『古今集』よみ人知らず

・白波は立てど衣に重ならず明石も須磨もおのが浦々

『拾遺集』柿本人麻呂

・明石濁色なき人の袖を見よすずるに月も宿るものは

『新古今集』藤原秀能

例* 《明石の濁》ツバキ科の一種。花は赤い大輪で二重。三月から四月に咲く。
* 《明石焼》江戸中期から明治にかけて明石一帯で焼かれた陶器。高麗写、安南写から京焼風色絵陶器まで多種に及び、「明石」「明石浦」「明石湊」などの印がある。

補 『南方録』以来、茶人好の歌となった定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」の一首は『源氏物語』明石の巻の「はるばると物のとどこほりなき海づらなるに、なかなか春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる陰どもなまめかしきに」に想を得たものといわれている。ちなみに歌語としての「明石」は「月」の縁語であり、「思いあかす」「明し」などを受ける掛詞となる。王朝時代の雅と都から離れた寂しさの漂う銘である。

【あかつき】 暁 アカツキ

① 夜の終わりとしての明け方。

② ある目標が念願適って実現に成功したとき。

季 ①②無季

同・あかとき

類・東雲・曙・雲居・有明

漢・春暁

孟浩然

春眠暁を覚えず 处处啼鳥を聞く 夜来風雨の声 花落つること知んぬ多少ぞ

『唐詩選』より

歌・有明のつれなくみえし別れより暁ばかりうきものはなし

『古今集』 壬生忠岑

・暁のなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

『後撰集』 紀貫之

例* 《暁の茶事》補 参照。

補 暁は古くは「あかとき」といった。夜の終わりとしての明け方を意味し、一日の始まりとしての夜明けをいう曙とは観点を異にする。妻問婚の時代にはきぬぎぬの別れを惜しむ時となる。夜を時間区分すれば、夕べ・宵・夜中・暁となる。茶事七事式の一つに暁の茶事がある。夜咄の茶事よりさらに遅い時刻、明け方に終えるよう未明のうちに始める茶事で、現代では冬の寒い時期に行われることが多い。夜込め・残灯・残月の茶事などとも言う。【あけぼの】曙 参照。

【あきかぜ】 秋風 アキカゼ

① 秋に吹くさわやかな風。

② 野分、すなわち台風。

季 ①②秋

同・金風・西風・涼風・素風・雁渡し・野分

類・浦風・松風・初嵐・野分

連・すすき・須磨

歌・君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸の簾うごかし秋の風吹く

『万葉集』額田王

・秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

『古今集』藤原敏行

・秋風に初雁がねぞ聞ゆる誰がたまづさをかけて来つらむ

『古今集』紀友則

句・あかあかと日はつれなくもあきの風

松尾芭蕉

例*玉子手茶碗。不味箱書。『雲州名物帳』所載。*《秋風袖垣》透しを施した透垣の種類。風を通し萩や黒穂を材とするところから名づけられた。

補 秋風は月、雁、夕暮、秋の雲、虫の音とともに秋を代表する風情に数えられる。四方の風位を四季にあてはめ夏は南風、冬は北風、春は東風、秋は西風といわれているが、秋風は夏と冬の季節風の間の時期であり実際には定まった風位はない。また、五行説では木を春、火を夏、土を夏の土用、金を秋、水を冬にあてる。従って金風とは秋風のこと。歌語として「飽き」を受ける掛詞となり、心の移ろうことの表現に用いられる。寂しさと爽やかさを併せ持

つ銘である。

【あきの】 秋野 アキノ

① 秋草が咲き、虫の音が聞こえる野。

② 紅葉し錦に彩られる野。

季 ①②秋

同・花野

類・野路・秋郊

連・紅葉・鹿・秋草・虫の音・露・千種

歌・萩の花尾花葛花などしこが花をみなへしまた藤袴朝顔が花

『万葉集』 山上憶良

・秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

『古今集』 紀友則

例*青井戸茶碗『雲州藏帳』に「秋野 青井戸 大阪加賀宇之助伏見屋 百両」とある。田部美術館蔵。*《秋の野》薄紫と黄色の染分け金団に餡を入れ細高く形成した菓子。円能斎好。*《秋野棗》利休所持黒塗大棗。萩・すすき・菊を金平蒔絵で描く。表千家蔵。*《秋野棗》燕庵名物。黒塗大棗。女郎花とすすきを金平蒔絵で描く。*《秋野鹿蒔絵手箱》国宝の手箱。出雲大社蔵。鎌倉時代作。螺鈿、研ぎ出し蒔絵、梨地などの技法により萩・鹿の親子・小鳥などが描かれている。*《秋野蒔絵硯箱》重要文化財。江戸時代初代五十嵐道甫造。高蒔絵・螺鈿・切り金・珊瑚の象嵌・銀板などの技法により秋草の咲き乱れる夜の野を描いている。

補 萩・尾花・葛の花・撫子・女郎花・藤袴・朝顔(あるいは昼顔・桔梗)を秋の七草といい、古くから秋の野を彩る花とされてきた。『源氏物語』乙女の巻に四季の風情を取り入れた六条院のお庭が登場し、ことさら秋の野が好評を博する。ちなみに、先載の「秋ちかう」の歌には「きちかう」即ち桔梗の古名が隠されている。秋草は色彩に恵まれながら派手ではなく愛らしい。秋の風情がしみじみ感じ取れる銘である。

【あきのくも】 秋の雲 アキノクモ

① 秋の空に高く見える雲。

季 ①秋

類・翳雲・鯖雲・鱗雲・ちぎれ雲・片雲

連・雲井

詩・雲

山村暮鳥

おおい 雲よ ゆうゆうと 馬鹿にのんきそうじゃないか

どこまでゆくんだ ずっと 磐城平の方までゆくんか

補 翳雲、鯖雲、鱗雲は同一の雲。翳の群れ、鯖の背の斑文、鱗の並ぶ形に似ることから名付けられた。もとは漁師言葉であったと思われる。学名は巻積雲。降雨の前兆といわれ縁起が良い。澄んだ空に高く浮かぶちぎれ雲を眺めると小学校の教科書にあった先載の暮鳥の詩が思い出される。

【あきのた】 秋の田 アキノタ

① 稲が実って色づいた田。

② 稲刈が終り切株だけの寂しい眺めの田。

季 ①②秋

類・田の色・刈田

連・落とし水・稲刈・実り・雀・案山子・鳴子

歌・秋田刈る仮廬を作り我が居れば衣手寒く露ぞ置きにける

『万葉集』 作者未詳

・秋の田の刈穂の庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ

『後撰集』 天智天皇

・秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

『古今集』 兼芸

補 『小倉百人一首』の巻頭で知られる先載天智天皇作といわれる歌はその前

の「秋田刈る…」の万葉歌が元となっている。落とし水とは稲穂が垂れ始めた頃田の水をぬくこと。稲刈の約一ヶ月前に行く。田園風景の広がりと収穫の喜びが伝わってくる銘。

【あきのよ】 秋の夜 アキノヨ

① 夏の短夜に対し、日暮の早まりにつれ夜が長く感じられる時期の夜。

季 ①秋

同・夜長

連・月・夜学・虫の音

歌・秋の夜の千夜を一夜になぞらへて八千よし寝ばや飽く時のあらむ

『伊勢物語』二十二より

例*奥高麗茶碗。出光美術館蔵。*《秋の夜棗》玄々斎好中棗。すすき、萩、菊が黒絵で描かれ甲に銀の露が数個打つてある。*《秋夜》高取焼茶入。中興名物。千個に一つの名品であるとして右記『伊勢物語』の歌より遠州が命銘。『大正名器鑑』所載。

補 秋の夜は古くから「灯火親しむの候」で物思いに耽る季節とされてきた。夜学とは夜の勉強のことだが、茶の湯の世界では夜の読書用の灯火の火皿を置く台のことで、蓋置に見立て秋に用いる。物思いに耽る夜のしみじみとした風情を伝える銘である。【よなが】夜長 参照。

【あきまつり】秋祭 アキマツリ

① 春と秋、年二回の氏神祭の内。神に対する稲作の報謝の意があり、田から山へ帰る神を送る祭。

季 ①秋

同・村祭

連・御輿・縁日・実^{みのり}・祭囃子

句・年よりが四五人酔へり秋祭

前田普羅

補 もとは収穫後に新穀を供え神に感謝し、山に帰る神を見送る祭であった。近年の都市では収穫祭の意味が薄れ、収穫前の祭の準備期であった九月に早々と行ってしまうようになった。それが現在の御輿中心の祭の姿である。収穫の喜びと村の活気が伝わってくる銘である。【みのり】実り 参照。

【あきやま】秋山 アキヤマ

① 澄んだ大気に見える秋季の山。紅葉が見頃の山。

② 「慕ふ」に掛かる枕詞。葉が赤く色づくことの動詞を「したふ」というところから枕詞となった。

③ 椿の一種。茶花として知られる。

季 ①②③秋

同・秋の峰・秋嶺

連・紅葉・黄葉・彩り

漢・春山澹冶たんやにして笑ふがごとく、夏山蒼翠なつやまそうすいにして滴るしたたがごとし。秋山明浄あきやまめいじやうにして粧よそほふがごとく、冬山惨淡ふゆやまさんたんとして睡ねむるがごとし。

郭熙『山水訓』より

歌・冬ごもり 春さり来れば鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲かれど 山を茂み 入りても取らず 草深み取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてぞしのふ 青きをば 置きてぞ嘆く そこし恨めし 秋山そ我は

『万葉集』額田王

例*『秋の山』釘彫伊羅保茶碗。冬木・薩摩屋・三井・平瀬・田中の各家を渡り、鈍翁所持の後、現在湯木美術館蔵。『大正名器鑑』所載。*『秋の山路』円能齋好の菓子。蒸した栗を小判型に形成して両面を焼いたもの。

補 古来、春と秋の優劣論争は盛んで『古事記』応神天皇の段の、秋の紅葉を擬人化した秋山あきやまのしたひをとこ之下氷丈夫と、この弟、春霞を擬人化した春山はるやまのかすみをとこ之霞丈夫との妻争いに始まる。先載の「冬ごもり…」の歌は天智天皇が春山秋山の優劣をテーマに鎌足に詔して廷臣たちに詩を求めた際、額田王が長歌をもって秋山の優を述べたものである。『拾遺集』巻九にも同様の趣向の歌会が見られ、『源氏物語』（薄雲・野分・若菜下）にも春秋優劣の話題がある。時代を通して「唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる」（光源氏）という傾向はあるものの「春秋に思みだれて分きかねつ」（貫之）といったところが妥当な結論となろうか。彩り鮮やかな世界でありながら物悲しさが感じられる銘である。

【あけぼの】曙 アケボノ

① 明け方。空が明るんてくる頃。「明けほのか」の意。

② 春の風情のみどころとしての明け方。

季 ①無季 ②春

同・あさぼらけ・東雲しののあ

類・暁・有明の月

連・雲居

文・春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山際、すこし明かりて、むらさき
だちたる雲の細くたなびきたる。

『枕草子』一より

歌・み吉野のたかねの桜ちりにけり嵐も白き春のあけぼの

『新古今集』後鳥羽院

・今はとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空

『新古今集』寂蓮

例*漢作唐物茄子茶入。相阿弥から阿知子宗句、前田家へと伝えられた。*
彫三島茶碗。小堀大善書付。赤星家伝来。*利休作茶杓。内箱裏能蓋は卒啄
斎、蓋裏は覚々斎原叟筆。替筒江岑筆。*ツバキの一種。一重、淡紅色の花。
十一月から四月まで咲く。比較的育てやすいためかよく知られている茶花。
*《曙棗》朱漆香次形薄茶器。甲に鶴。胴に亀と松の黒絵がある。玄々斎が
長男一如斎の点初めに好んだ。*《曙椿》ツバキ科の茶花。淡紅色一重花。
茶花にはその他、曙草・いっつじ・葦などがある。

補②は『枕草子』以来定着した概念。朝のすがすがしさと春の暖かさが感じ
られる銘である。暁が夜の終わりとしての朝、明けてしまった朝を意味する
のに対し、曙は一日の始まりとしての夜明けをいう。「夕暮」に対応する言葉
で、もとは東雲しのぶの散文的語。後に歌語ともなった。《曙棗》の玄々斎長男の
一如斎は家を継ぐことなく、十七歳の若さで病死した。一行・画賛の佳作を
数点残す。【あかつき】暁 参照。

【あさみどり】 浅緑 アサミドリ

① 薄い緑色。新芽の色などの表現に用いられる。

② 薄い藍色。空の色、六位の袍の色などの表現に用いられる。

③ 「糸」「野辺」「柳」にかかる枕詞。

季 ①②③春

同・もえぎ色・草緑

連・芽生え・下萌

歌・浅緑染め懸けたりと見るまでに春のやなぎは萌えにけるかも

『万葉集』作者未詳

・春雨のふりそめしより片岡のすそ野のはらぞ浅緑なる

『千載集』藤原基俊

・浅緑空ものどけき春の日は暮るる久しきものところ聞け

『栄花物語』卷十一より

補 春の初々しい生命力が感じられる銘である。

【あしかり】葦刈 アシカリ

① 水辺の葦を刈ること。又は刈る人。
② 能の曲名。世阿弥作。四番目物。男物狂物。摂津・難波を舞台とする。都で奉公するツレが供を連れ里帰りをするが、夫は零落した身を恥じて行方不明となつていてた。偶然出会った葦売りの男が夫であることに気づき夫婦は再開を果たす。

季 ①②晩秋

同・蘆刈・芦刈

連・雁・水鳥・葦火・漣標

曲・露ながら 難波の芦を刈り持ちて 夜は月をも運ぶなりや 暇惜し夕汐の 昼のうちに召されよや 昼のうちに召されよ 『芦刈』より

歌・玉江こぐ葦刈りをぶねさし分けて誰をたれとか我はさだめむ

『後撰集』よみ人知らず

補 葦は水辺に群生するイネ科の植物。茎は垣、簾あるいは屋根を葺く材料となる。貧しい田舎の生活、寂しい風情を象徴する。葭・蘆・葦の三字あり中国語ではこの順に初生から成長段階によって使い分けている。ちなみに芦は蘆の新字。日本語ではアシの音を嫌いヨシと読ませることもある。秋の物悲しい風情が溢れる銘である。

【あしび】葦火 アシビ

① 葦を焚いて生活に利用する火。昔の貧しい家の火気。
② 葦刈人が濡れた体を暖め乾かすために焚いた火。
③ 枯葦原に放った火。

季 ①②③秋

連・海人・苔屋・節・葦刈・葦刈

曲・夜寒さこそと思へども 葦火にあたりてお泊りあれと 申し候へ

『松風』より

歌・難波女の衣ほすとて刈りて焚くあし火の煙たたぬ日ぞなき

『新古今集』紀貫之

補 歌語としての芦火は①が多い。いずれも侘しき、寂しさを表わす。「節」ふしは「葦」の縁語。

【あしび】葦辺 アシベ

① 葦の生えている岸辺。

季 ①晩秋

連・田鶴・雁・葦刈・和歌の浦・滯標

歌・和歌の浦に潮満ち来れば潟をなみ葦辺をさして鶴たづ鳴き渡る

『万葉集』山部赤人

・あし辺こぐ棚無し小舟いくそたび行きかへるらむ知る人もなみ

『伊勢物語』九十二より

・わかの浦あし辺のたつの鳴く声に夜わたる月の影ぞさびしき

『新勅撰集』後堀河天皇

補 【あしかり】葦刈 【あしび】葦火 参照。

【あじろ】網代 アジロ

① 川や入江などで行う漁獵の仕掛。水中に杭をならべ魚を誘導し簀の上においやる漁法。古くは宇治川や田上川の氷魚(鮎の稚魚)漁が有名であった。

② 「宇治」「寄る」の縁語。

③ 竹や木、杉皮などのへぎ板を斜めに組んだもの。天井、垣などに用いる装飾的建材。茶室では網代天井、露地の網代垣などがその例。

季 ①冬 ②③無季

連・清流・宇治・若鮎

歌・もののふの八十字治川の網代木にいさよふ波の行くへ知らずも

『万葉集』柿本人麻呂

・数ならぬ身を宇治河の網代木に多くの氷魚も過ぐしつるかな

『拾遺集』よみ人知らず

・あさぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木

『千載集』藤原定頼

例* 《網代旅篁筥》 玄々斎好。利休好の旅篁筥に手を加えたもの。前戸と柵の側面が網代組になっている。

補 網代木は網代の杭のことであるが歌語では音節の都合で網代と同義語に用いられる。「網代打つ」は網代の仕掛を築くことをいい、一足早い晩秋の季語である。③の網代天井は点前座の落ち天井などに使われ、客に対し謙った亭主の気持ちを表わす。流水を連想させるためか、夏季の茶杓の銘に用いる例も知る。

【あすかがは】 飛鳥川 アスカガワ

① 奈良県高市郡明日香村付近を流れる川。大和川に注ぐ。万葉時代から歌に詠まれる。

② 能の曲名。狂女物。離れ離れになった母を探し求める友若が、大和国飛鳥川のはとりで田植女と出会う。その女が母と気付き再会を喜ぶという親子再会譚。面はシテⅡ曲見。

季 ①無季 ②夏

同・明日香川

連・月日・甘樫丘・田植・友若・淵瀬

文・川は飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむとあはれなり。

『枕草子』五十九より

・飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、樂しび・悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変らぬ住家は人改まりぬ。

『徒然草』第二十五段より

歌・明日香川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

『古今集』よみ人知らず

・世の中は何か常なる明日香川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

『古今集』よみ人知らず

・昨日といひ今日とくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

『古今集』春道列樹

例*瀬戸金華山窯茶入。飛鳥川手本歌。右記の「昨日といひ…」の歌を引いて

遠州が箱書命銘。同手のものに〈鷹羽山〉〈木枯〉〈三笠山〉〈庇肩衝〉などがある。

補「明日香」の枕詞は「飛ぶ鳥」であり、そこから「飛鳥」も「アスカ」と読むようになった。水源は高市郡竜門、高取山付近の山地で、柏森、稻淵、祝戸を経て盆地へ降り、石舞台のある島之庄、甘檜丘、藤原京跡などの史跡を通り明日香の地を北西に横切る川。川下で大和川に注ぐ。近年、発掘や研究が進む古代の苑池遺構は、いずれもこの川を水源として造られた遺構だ。昨日、今日、明日の「アス」から飛鳥川を連想して月日の流れの早さを喩えて、除夜釜など歳月の節目によく登場する銘である。また、この川は定めなきものの喩えにも使われる。蛇行の変化が激しかったための表現といわれる。しかし、古代の河川に氾濫はつきもので、特に飛鳥川が氾濫の多い川だった記録はない。歌人が川を実見していたであろう『万葉集』には川の流れを「早み」と上流を詠んだ歌はあっても流域の変化を強調する歌はない。「淵瀬も定めなく」といった定めなき世の喩えはむしろ大和の地から都が平安京へ遠ざかって以降盛んになる。川の実態とは関係なく、歌人が「明日」という言葉により明日への悲観的、感傷的観点から「定めなき世」を連想したのではないだろうか。

【あはぢ】淡路 アワジ

① 淡路島。大阪湾と播磨灘の間に位置する瀬戸内海最大の島。兵庫県に属す。面積約五九六平方km。『古事記』『日本書紀』の国生み神話に登場し『万葉集』にも詠まれる。歌語として「逢はじ」を受ける掛詞となる。語源は阿波国へ行く路という意味であろうか。

② 能の曲名。脇能物。男神物。淡路島を舞台とし、『記紀』の国生み神話を基とする。廷臣一行が玉津島詣での帰り淡路の旧跡を訪れると、老翁と若者が田の水口に幣帛を立てて耕作する姿を見る。その訳を尋ねるとこの田は伊弉諾命、伊弉冉命の二柱を祀る二ノ宮の供田であることを告げる。そして二柱の国生み神話を語り消える。その夜いざなぎの命が現れ神舞を舞う。面は天神(金春) 邯鄲男(観世)。

季 ①無季 ②春

同・淡路島・一洲

類・一の瀬戸

類・一の瀬戸

連・大八洲・伊弉諾命・伊弉冉命・須磨・明石・千鳥・霞・月

文・伊耶那岐命、先に「あなにやしえをとめを」と言ひ、後に妹伊耶那美命「

あなにやしえをとめを」と言ひき。かく言ひをへて、御合して生める子は、

淡道之穂之狭別島。次に伊予之二名島を生みき。

『古事記』上巻より

曲・神の代の跡を残して海山ののどけき波の淡路瀉

『淡路』より

歌・淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいくよ寝覚めぬ須磨の関守

『金葉集』源兼昌

・淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵は所がらかも

『新古今集』凡河内躬恒

例* 《淡路焼》平保六年(1835)に賀集珉平が尾形周平の指導を受けてこの地に開窯。珉平焼とも呼ばれる。幅広い作陶の中で色絵茶碗、水指、香合に優れたものがある。

補 淡路島の語源は阿波へ行く途中の島であることからついたとする説、粟を産する地すなわち粟地とする説、伊弉諾命、伊弉冉命が設けた不具児としての島を吾恥の島とし、吾恥の訓からついた名とする説がある。『記紀』に拠れば、伊弉諾命、伊弉冉命が設けた大八洲の内最初に設けた島であるという。これは淡路島が古くから大和朝廷の勢力範囲にあり、産物、交通の要所であったことを物語る。海の香りと神話のロマン漂う銘である。

【あはゆき】淡雪 アワユキ

① 積もらずに消える雪。積もっても消えやすい雪。主に春に降る雪をいう。

② 「淡雪の」は「消」にかかる枕詞。

季 ①②春

類・沫雪・泡雪・名残雪

連・梅・鶯・薄氷

歌・はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

『源氏物語』女三宮

・春日野の下萌えわたる草の上につれなく見ゆる春の淡雪

『新古今集』源国信

例*赤楽茶碗、道入(ノンコウ)造。如心斎箱書命銘。*岡崎・広島など各地に見られる卵白を材料とした棹物菓子。「阿は雪」など別の字を当てるものもある。*にがりを使わず作ったやわらかい豆腐。淡雪豆腐。*卵白や山芋を摺って蕎麦などにかけてたもの。

補 上代では「沫雪」「泡雪」でやわらかい新雪をいうが、その後「淡」の字を用い、消えやすい春の雪をいうようになった。【あわゆき】沫雪 参照。

【あひおひ】相生 アイオイ

- ① 生まれが同じこと。
- ② 共に長生きすること。特に夫婦の長寿をいう。
- ③ 相生の松。高砂の松、住吉の松の双方をいう。播磨国を舞台とする謡曲『高砂』に登場する。相生は謡曲『高砂』の古称でもある。
- ④ 兵庫県相生市、高砂市相生町などの地名。
季 ①②④無季 ③春
同・相老・相生の松・相逐
類・高砂・住吉・住の江・姫松
連・颯颯・長寿・夫婦
文・高砂住吉の松もあひおひのようにおぼえし

『古今集』仮名序より

曲・高砂住之江の松に相生の名あり 当所と住吉とは国を隔てたるになにとて
相生の松とは申し候ふぞ
『高砂』より

補 同音の「相老」の意味も含ませ②の意味となった。相生の松は謡曲『高砂』に登場する松。松は古くから神の依代として崇められてきた常緑樹で、不老長寿の象徴でもある。夫婦の長寿を祝うにふさわしい銘である。

【あふひ】葵 アイオイ

① 双葉葵。ウマノスズクサ科の多年草日影草。ハート形の双葉。五月に淡紅紫の花が咲く。平安時代、葵と呼ばれるのはこれ。賀茂祭に鬘として用いられた。

② 冬葵。ツユアオイ科の多年草。春にはすでに淡紅色五弁の花を咲かせる秋草であるが、冬にもなお花が残るのでこの名がついた。名から季語としては冬に属する。『万葉集』で葵とあるのはこの花のこと。薬用として栽培された。

③ 立葵。アオイ科の越年草。現在鑑賞用に栽培されている葵はこの花。初夏、紅色、ピンク、白、紫など多彩な種類があり、葉はハート形。

④ 紫式部『源氏物語』巻九の巻名。光源氏二十二歳から二十三歳春まで。源氏の子を宿す葵の上は賀茂の祭りの見物に車を出す。ところが従者たちがかねて源氏の冷たい態度に悩んでいた六条御息所の車と場所取り合戦となり、御息所の車を退けてしまう。御息所は失意のうちに怨霊となって葵の上や源氏の前にあらわれる。葵の上は夕霧出産の後、死んでしまう。

⑤ 徳川家の紋章として知られる三つ葉葵の意匠。②の葵よりの凶案。

季 ①夏 ②秋 ③夏 ⑤無季

同・かざし草・もろは草・賀茂葵

類・懸葵・葵蔓

連・葵上・葵祭・賀茂・牛車・徳川家・賀茂物狂

文・何となく葵懸け渡してなまめかしきに、明けはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなと思ひ寄すけば、牛飼・下部などの見知れるもあり。
『徒然草』 第三百二十七段より

・「祭過ぎぬれば、後の葵不用なり」とて、ある人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなく覚え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろともみすの葵の枯葉なりけり

と詠めるも、母屋の御簾に葵の、懸りたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。
『徒然草』 第三百二十八段より

歌・梨棗きみにあは継ぎ延ふ葛の後にもあはむとあふひ花咲く

『万葉集』 作者未詳

・ゆき帰る八十氏人の玉鬘かけてぞたのむあふひてふ名を

『後撰集』 よみ人知らず

・はかなしや人のかざせるあふひゆるゆるしのけふを待ちける

『源氏物語』源典侍

・今年より摘むべきものかちはやふる賀茂の祭りにかざすあふひは

『宇津保物語』東宮

句・地に落ちし葵踏みゆく祭りかな

正岡子規

補単に葵という学名の植物はない。右記の①②③は各々異種の植物。『新撰字鏡』には「阿保比」とあり「あふひ」「あほひ」「あふい」などの訓がある。葵祭は京都三大祭のひとつ。古くは賀茂の祭りと呼ばれ石清水八幡宮の南祭に対して北祭とも呼ばれた。都で単に祭りといえば賀茂の祭りのことであつたほど代表的な祭り。大同二年(802)より皇城鎮護を願う勅祭となった。その人気の高さは『伊勢物語』百四・『枕草子』三・『徒然草』第三百三十七段などで伺い知ることができる。祭の最も華やかな儀は路頭の儀で、現代でも平安時代の衣裳を凝らした行列が牛車を仕立てて京都御所から下賀茂神社、上賀茂神社へと巡行する。このとき衣冠や牛車に葵の葉を付け、家々の軒にも葵を飾る習いがあつたところから葵祭の名が生まれた。平安期には沿道に所により棧敷が設けられ、物見車が集まった。『源氏物語』葵の巻の有名な葵上と六条御息所との車争いはこの祭見物の場所取り合戦であつた。昔は四月の酉の日に行われたが現在は五月十五日。【かも】賀茂 参照。

【あまのがは】天川 アマノガワ

① 銀河の異名。川のように夜空にかかる大星群。年に一度七夕の日に彦星と織姫は天の川を渡つて会えるという七夕伝説の舞台。

季 ①秋

同・河漢・銀漢・天漢・天の海・星の林・星合の空・銀河

連・七夕・鵲・牽牛・織女・乞巧奠・短冊・笹葉・笹舟・関寺小町

漢・古詩十九首 其の十

迢迢たり牽牛星 皎皎たり河漢の女

織織として素手を擢げ 札札として機杼を弄す

終日章を成さず 泣涕零ちて雨の如し

河漢は清く且つ浅し 相去ること復た幾許ぞ

盈盈たる一水の閒 脈脈として語るを得ず

『文選』卷二十九

・調笑 韋應物

河漢よ河漢よ 暁に秋城に挂りて漫漫たり 愁人起ち望みて相ひ思ふ
江南と塞北との離別 離別よ 離別よ 河漢は同じと雖ども 路絶ゆ

『韋蘇州集』より

歌・天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ

『万葉集』 人麻呂歌集より

・わが上に露ぞ置くなる天の川門渡る舟のかいの雫か

『古今集』 よみ人知らず

句・荒海や佐渡によこたふ天河

松尾芭蕉

例* 《天の川席》武者小路千家東京出張所内半床庵、嵯峨龍内荘などに見られる。点前座を部屋の中央にし、左右に客座を設けた茶室。久田宗全好。

補 七月七日、七夕は五節句のひとつのことだが、中国ではこの日に乞巧奠といつて女子が裁縫の上達を願うお祭りをした。「たなばた」とは棚機、つまり機織の道具のこと。さらに、はたを織ること、織る人のこともいうようになった。奈良時代に乞巧奠の風習が日本に伝わり、いつしか七夕の文字を乞巧奠に因み「たなばた」と読むようになった。日本では奈良時代以前から伝わっていた祭りだが、『延喜式』に『七月七日、織女祭』の記載が見られ、平安時代初期には宮中でも何らかの行事があったようだ。天の川は漢語で銀漢・天漢・河漢・星河、いわゆる銀河のこと。「漢」は湖北省の大河漢水に因むという。その総体は恒星とそれに伴う惑星の集合で、渦状に、凸レンズのような中央に厚みのある円形を成している。直径は十万光年、中央の厚みは一万五千光年、太陽系の位置は銀河系中心から約三万光年、厚みは五千光年。銀河系は約二千億個の恒星のほか、惑星状星雲、散開星団や散光星雲などで構成されている。一般的に天の川は銀河系に限らず流れ星(隕石)など、晴れた日の夜に光の帯となって肉眼で見える大星群全てを含んでいる。牽牛は鷲座(Aquila)のAltair、織女は琴座(Lyra)の星Wegaのこと。古代中国では農耕社会特有の星への関心から星の観察は驚くほど進んでいた。この星の名はすでに『詩経』小雅・大東(紀元前470年頃)に見られる。ただし、二星のめぐり

逢い伝説は『詩経』には確認できない。一星のめぐり逢い伝説は先載『文選』にほめかされている。『文選』は530年頃の成立だが、この詩は後漢末頃の詩と考えられている。二星のめぐり逢い伝説は三世紀には民間伝承として成立していたと思われる。その他六世紀中期の『荆楚歳時記』にも「七月七日、牽牛、織女、聚会の夜と為す」とある。万葉歌で星の歌は約二十首しかなく、しかも大半は中国の七夕伝説をなぞった歌である。月とは比べものにならないほど数は少なく、日本人はあまり星に興味がなかったようだ。その中で先載『万葉集』人麻呂歌集の歌は「天の海」「星の林」など比喩が面白い。七夕は七月(地方により八月)の茶を代表する趣向といえる。糸巻形の道具で織姫を、牛にちなむ道具で彦星を表わすことが多い。その他、存星・亀藏棗・三光棗なども相応しい。【かささぎ】鵲参照。

【あまもり】雨漏 アマモリ

① 屋根や天井から雨水が漏ってくる。または、その跡の染み。

季 ①無季 夏

連・雨季・梅雨・五月雨・夕立

例*高麗茶碗に生じた染みのような景色。長年使い続けた末、釉薬のかからない箇所から染みが広がり、表面に雨漏りした壁のような景色ができた茶碗。特に粉引、熊川、堅手などに多い。この内、堅手茶碗のものを雨漏堅手という。畠山記念館や福岡市美術館の物が有名。

句・五月雨や色紙へぎたる壁の跡 松尾芭蕉

補 雨漏茶碗はよく使い込んであるが故に侘びた風情のある茶碗が多い。さらに「雨漏」という名によりその趣は一段と増す。

【あまやどり】雨宿 アマヤドリ

① 不意の雨を避けて、しばらく軒下、木陰など適当な所にたたずむこと。

季 ①無季 夏

同・雨よけ・雨やど・雨休

連・夕立・驟雨・山吹・東屋

文・この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、..

曲・一村雨のあまやどり 日はまだ残るなかやどに かりねの夢を見るやと 邯

鄴の枕に臥しにけり

『邯鄴』より

歌・いづ方へ秋のゆくらむ我がやどに今宵ばかりは雨やどりせよ

『詞花集』藤原公任

例* 《雨宿芋の子》中興名物瀬戸芋の子茶入。遠州命銘。先載の「いづ方へ…」の公任の歌を引いた命銘と思われる。* 《雨宿茶器》先載芋の子茶入の挽家を写した薄茶器。竹材の筒形。高蒔絵で菊が短冊の付いた竹竿に添って描かれている。挽家は菊により秋を、短冊により歌銘であることを表し、公任の歌を暗示している。中山胡民作。* 《雨宿香合》先載の薄茶器と同じ手の香合。中山胡民作。

補 雨宿りといえは太田道灌(1432~86)の逸話が思いだされる。道灌は上杉定正の重臣。武勇・兵法に有能な室町時代中期の武将として世に知られている。ことに江戸城築城は有名。あるとき道灌は狩のさなか驟雨に見舞われ、貧しい百姓屋に雨宿りした。そこで蓑を所望したところ、家の幼い娘は蓑を出さずに微笑みながら山吹の花を差し出し頭を下げた。そのとき道灌は少女の意を解すことができなかった。後に、娘の意図は『後拾遺集』兼明親王の「七重八重花は咲くとも山吹の 実の ひとつだになき ぞかなしき」をかけたものであることを知り、彼は大いに慚悔したと伝えられる。ヤエヤマブキ・シロハナヤマブキは実を結ばない植物で少女は「実の」と「蓑」をかけ、山吹を差し出すことにより「蓑がない」と返答したのだ。この雨宿りが契機となり、道灌は詩歌の勉強に励んだという。そして、和歌・漢詩にも長けた人物として武勇の名声に花を添えた。この逸話が史実であるか否かはさて置き、彼が江戸城に五山文学後期の僧、玉隠英瓊たまかくしやう・万里集九ばんりしゅうくを招き詩歌会を催したのは史実である。雨宿りといえはもうひとつ謡曲『邯鄴』が思い出される。蜀の国に盧生という若者がいた。彼は人生に迷い、仏道の師を求めて羊飛山に旅立った。途中、邯鄴の里の宿で雨宿りをしたとき、宿の女主から不思議な枕を貸してもらい、粟飯が炊けるのを待つ間、盧生は仮眠についた。そこへ楚の国の使者一行がやって来て盧生を起こした。使者は帝からの讓位の勅を伝え盧生を都に迎える。即位した盧生は五十年も在位し、帝として栄華を極める

のであった。やがて、宿の女主に起こされ、一連の栄華は全て粟飯が炊ける間の夢の中だったことを知る。茫然とする盧生はやがて人生の意義を悟り、故郷に帰っていった。いずれも雨宿りが人生を省みる契機となった話である。

【あらいそ】 荒磯 アライソ

① 人けのない、波の荒い磯。

② 歌枕。越中国射水郡。広義には現在の富山湾の海岸を総称する。

③ 「在り」「有り」に掛かる枕詞。

季 ①②③無季

同・荒磯 ありそ

類・荒磯島・浪・海・浦・浜

連・俊寛

歌・かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の浪も見せましものを

『万葉集』 大伴家持

・あらい磯の玉藻の床にかりねしてわれから袖をぬらしつるかな

『新勅撰集』 式子内親王

句・早稲の香や分け入る右は有磯海

松尾芭蕉

例*黒楽茶碗、道入(ノンコウ)造。一燈宗室の箱書命銘。福井家伝来。*《

荒磯金襴》荒磯緞子。波に跳ねる魚(鯉)の意匠。*《荒磯香合》交趾型物香

合。甲に波と鯉の文様。鯉は白檀塗。番付東三段七位。*《荒磯棚》淡々齋

好。桐木地二重棚。

補波に跳ねる魚(鯉)の意匠を荒磯文といい、諸道具の意匠に用いられている。

海の力強さと磯の香りが感じ取れる銘。

【あらしやま】 嵐山 アラシヤマ

① 京洛西の歌枕。現在の京都市西京区の大堰川西岸の山間。広義に大堰川兩岸一帯をも含めることがある。古来紅葉の名所だが中世以降桜の名所ともなる。

② 能の曲名。脇能物。荒神物。金春禅鳳作。脇能物。荒神物。桜の盛る嵐山に勅使一行が到着する。花守の翁と媼が現われこれらの木が神木であり、吉野山より移植したことなど嵐山の桜の木のいわれを語る。翁と媼は実は木守

の神、勝手の神であることを告げ去る。夜になると木守、勝手の神が若い男
女の姿で現われ、花をめでて天女の舞を舞う。やがて蔵王権現も現われ花の
盛を祝賀する。前ジテⅡ着流出立尉・後ジテⅡ大飛出。

季 ①春・秋 ②春

連・白頭・紅葉・小倉の峰・戸無瀬の滝・月・行幸・吉野・雲錦・保津川・渡

月橋・西行桜・木守

曲・げにやさしもこそ 厭ふ憂き名の嵐山 とりわき花の名所とはなにしに定
め給ひけるぞ

『嵐山』より

歌・朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき

『拾遺集』藤原公任

・亀山の仙洞に吉野山の桜をあまた移し植ゑ侍りしが花の咲けるをみて太
上天皇(後嵯峨上皇)春ごとに思ひやられし三吉野の花は今日こそ宿に咲き
けれ

『続古今集』より

・あらし山おつるも花の雫にて雨さへをしきこちこそすれ

『桂園一枝』香川景樹

例*瀬戸後窰茶入。万右衛門造。遠州箱。『大正名器鑑』所載。 *《嵐山

棗》玄々斎好。溜塗中棗。七代宗哲造。西山名所棗の内、で甲に「嵐山」と
あり箱の歌と続けると「嵐山名におふ花もうつろはて松の千とせにちぎる春
秋」となる。

補 建長年間、後嵯峨上皇が亀山の離宮(現在の天竜寺の地)に吉野の桜を移植
した史実を基に、対岸の嵐山に移したとする伝承が生まれた。以来、嵐山一
帯は紅葉と桜両方の名所となった。嵐山、嵯峨野付近に関わる謡曲に『嵐
山』『小督』『松尾』『百万』『野宮』『車僧』がある。

【あらたま】新玉 アラタマ

① 磨きをかけていない玉の原石。

② 「年」「月」「春」に掛かる枕詞。

季 ①無季 ②新年 春

同・粗玉・荒玉・璞

類・新玉の年の初め

連・新年・破魔弓・訶梨勒・初詣

歌・あらたまの年たちかへる明日よりまたるものは鶯のこゑ

『素性集』より

・あらたまの一夜ばかりをへだつるに風の心ぞこよなかりける

『恵慶集』より

補 新年を表す言葉として初釜に相応しい銘である。玉は命の意味もある。

【ありあけ】 有明 アリアケ

① 夜が明けてもなお月の残る朝。

② 明けた空に残る月。

季 ①②秋

同・有明の月・朝月・残月

連・暁・曙・東雲

文・弥生も末の七日、あけぼの朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰幽かに見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心ぼそし。

『おくの細道』より

歌・有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし

『古今集』 壬生忠岑

・今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな

『古今集』 素性

例*片桐石州作、茶杓共筒。*宗旦作、尺八花入。『雲州名物帳』所載。*名物唐物茶壺。『天王寺屋会記』などに記載がある。

補 有明の月は陰暦十六日から二十日頃に起こる現象。きぬぎぬの別れのつれなさを象徴する月でもある。

【ありどほし】 蟻通 アリドオシ

① 能の曲名。四番組物。特殊物。世阿弥作。四番組物。特殊物。和泉国を舞台とする。和歌の神、住吉・玉津島詣をした紀貫之が道中大雨に合い馬も倒れ途方に暮れているところ、老宮守(明神の仮姿)が現われ、蟻通明神の神域に馬を乗り入れたことの咎めであることを告げる。貫之は蟻通明神の怒りを歌を詠んで鎮める。面はシテⅡ小尉。

② 竹茶杓の節部に開いた小さな虫喰穴。珍しいもので、景色として茶杓の見どころとなる。

季 ①初夏 ②無季

連・松明・傘・蟻通明神

曲・あら勿体なおん事や 蟻通の明神とて 物咎めし給ふおん神の かくぞと

知りて馬上あらば よもおん命は候はじ

『蟻通』より

歌・かき曇りあやめも知らぬ大空にありとほしをば思ふべしやは

『貫之集』紀貫之

例*原叟宗左作共筒茶杓。不審庵蔵。

補 蟻通明神の名の由来は清少納言が「まことにやありけむ」と前置きしたうえで、『枕草子』（テキストによつて224 226or227）「社は布留の社。…」に詳しく書いている。それによると、昔、若者をかわいがり、年寄りを避ける帝がいた。帝は四十歳を過ぎた老人は殺させたので、年をとると皆は都の外に隠れ住んだ。そのため都は老人がいなくなってしまった。都に住む中將は大変親孝行で、自分の館に七十を過ぎる親を隠し住まわせていた。あるとき唐国の帝が日本の侵略を企て、日本人がどれほど賢いか試すことにした。まず、二尺ほどの材木を日本の帝に送り、どちらが先かと問うた。帝が困っているのを知り、中將は家に帰り親に事情を話した。すると親は、流れの速い川に材木を横向きに流し、川下を向いている方が先だと答えた。中將は自分の意見として早速帝に上奏して見事唐国の帝を納得させた。すると今度は、唐国から同じ長さの二匹の蛇が送られ、どちらが雄でどちらが雌かと問うた。これも中將は親から答を得て、尾のほうに細い若枝をさし、尾が動かなければ雌と識別できた。さらに、唐国は七曲にくねった細い穴の貫通した玉を送りつけ、これに緒を通せといった。これも中將は親から答を得て、蟻の腰に細い糸を付け、片方の穴の口に蜜を付け、もう片方から蟻を通し緒を通すことができた。これにより、日本人は賢いと唐国の帝は悟り、侵略をあきらめたという。帝は大層喜び、中將に官位や褒美をとらせようとしたが、無欲な中將は親と都で住むことの許しを請うた。帝はこれを許したという。関連・類似する話は『雑宝蔵経』『法苑珠林』『賢愚経』『祖庭事苑』『奥儀抄』

などの仏典・漢籍などに見られるまた茶杓の中節の部分が腰高になり畳に付かない形を蟻腰という。蟻が腰の下をくぐれそうだからである。また、中節付近に穴の開いた茶杓、あるいはその穴を蟻通と呼ぶ。先載の原叟宗左作の茶杓を本歌とする。

【ありま】有馬 アリマ

① 兵庫県神戸市北区有馬町付近の山地。古くから温泉地として知られる歌枕。天正十一年(1583)秀吉はここを直轄地とする。彼が頻繁に訪れ茶会を催していたらしいことは『天王寺屋会記』などで伺い知ることが出来る。

季 ①無季

同・有馬山・湯山

類・有馬茶会記

連・阿弥陀堂

歌・ありま山ゐなのささ原かぜ吹けばいでそよ人を忘れやはする

『後拾遺集』大弐三位

例* 《有馬山》小堀遠州作茶杓。孤蓬庵蔵。* 《有馬山》片桐石州作尺八竹花入『雲州名物帳』所載。* 《有馬香合》三条西実隆所持。有馬の木工といわれる。* 《有馬筆香合》呉須型物香合。蓋のつまみが有馬筆の人形細工に似ているところから付けられた名称。番付西二段二十位。

補 『有馬茶会記』(五島美術館蔵)によれば天正十八年(1590)十月四日、有馬温泉阿弥陀堂の二畳敷茶室にて秀吉が茶会を催す。茶堂は利休で虚堂墨蹟・鳴肩衝・曾呂利の花入など名物を用い、客には小早川隆景・有馬則頼・津田宗及・瀬田掃部等々の名が見える。利休好の阿弥陀堂釜はこの会記が初見で、この地の阿弥陀堂に由来するという伝承がある。以降、有馬は茶の湯と深く関わるようになり、既に挙げた香合の他、有馬籠・有馬箕炭斗などの木工竹工による茶道具の製造が盛んとなった。

【あわゆき】沫雪 アワユキ

① 泡のようにやわらかい雪。特に降ったばかりの雪をいう。新雪。

② 消えやすいところから「消」にかかる枕詞。

季 ①冬

同・泡雪あわゆき

類・初雪・淡雪

歌・沫雪のほどろほどろに降り敷けば奈良の都し思ほゆるかも

『万葉集』 大伴旅人

補 上代では「泡雪」「沫雪」と書き冬の降ったばかりの柔かい雪、新雪をいうが、中古になると「淡雪」と書き春の消えやすい雪をいった。【あはゆき】
淡雪 参照。

【あをかへで】 青楓 アオカエデ

① 薄緑色の楓の葉。日影を通す新緑の楓の葉。

季 ①夏

同・若楓

類・若葉

連・木陰・緑陰

歌・川しにも瑞枝ひろぐる若楓癒えかてめ身の目身にけぶらふ

吉野秀雄

例*落雁でできた打物の干菓子。薄緑色の楓の葉の形をしている。

補 楓はカエデ科の落葉高木。秋の紅葉で名高いが、初夏のみずみずしい若葉の楓も青楓と呼ばれ見ごろである。さわやかな薄暑の木陰を連想させる銘。ちなみにカヘデの語源は蛙手。まぶしい初夏の光の爽やかさが感じ取れる銘。

【あをた】 青田 アオタ

① 収穫時期前の稲が青々としている田。

季 ①夏

類・青田道・青田風・青田波

連・田園

文・凡京中には源氏みちくくて、在、所、に入りどりおほし。賀茂、八幡の御領とも言はず、青田を刈りてま草にす。『平家物語』 卷八より

歌・朝日さす青田の原の平らかに国大いなる岩木山かも 太田水穂

句・山々を低く覚ゆる青田かな 与謝蕪村

・脊戸の不二青田の風の吹き過る 小林一茶

・青田より水の高さや葺沼

高浜虚子

楠刈り取り前の晩夏(七月下旬)の田園風景を思わせる銘。青田波は稲田が風に波のようにそよぐ様。その風を青田風という。

【あをによし】青丹よしアオニヨシ

①「奈良」にかかる枕詞。

季 ①無季

連・奈良・平城京・大仏

歌・あおによし寧樂の都は咲く花の薫ふがことく今盛りなり

『万葉集』小野老

例*奈良の干菓子。短冊型の押し物。寒梅粉・片栗粉を主材料とする。赤・青の二種があり白い雲を散らしてある。

補 枕詞について、奈良地方から丹青(岩緑青)を産出したことに由来を求める説のほか、草木の緑色と都の建造物の丹(赤)の色の見事な対比をいうとする説がある。古都の趣を感じさせる銘である。

【あんど】安居 アンゴ

① 夏安居のこと。仏制の一つ。禅宗では四月十六日より九十日間寺に籠り座禅修業に励む。十月よりの冬安居もあるが、安居とだけいう場合、夏安居をいうのが普通。

季 ①夏

同・夏安居・雨安居・夏行・坐夏・夏籠

類・夏書・夏断

連・夏・禊

文・この夏初めて僧尼を請ひて宮中に安居せしむ。

『日本書紀』天武十四年より

曲・さてもわれ一夏の間、花を立て候。はや安居も過ぎ方になり候へば

『半部』より

歌・一日の安居をはりて楼を下り成れる林檎をなでてみて帰る

土屋文明

・うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の畳に蟻を見しかな

齋藤茂吉

補 素形はインドにあるが、わが国でも右記のとおり『日本書紀』に宮中での記録がある。安居の開始を結夏・結制、終了を解夏・解制、期間中を一夏・夏百日などという。

【いさりび】 漁火 イサリビ

① 夜、魚を漁船に誘き寄せるために焚く火。

② 「漁火の」は「ほのか」にかかる枕詞。

季 ①②無季

類・漁り舟

連・沖

歌・漁火のよるはほのかにかくしつゝ有へば恋の下にけぬべし

『後撰集』藤原忠国

補 漁火が沖にほのかに見られることから②の意味が生じた。夜の海の風情が感じられる銘である。

【いはしみづ】 岩清水 イワシミズ

① 岩の間から湧きでる清水。

② 京都府八幡市男山の中腹から湧き出る名水。

③ ②の地域一帯の略称。歌枕。

④ ②にある岩清水八幡宮の略称。男山八幡ともいう。

季 ①夏 ②③④無季

同・清水・苔清水・岩もる水

歌・岩清水清き流れのたえせねばやどる月さへ隈なかりけり

『千載集』能蓮

・男山さしそふ松の枝ごとに神も千歳を祝ひそむらむ

『拾遺愚草』藤原定家

例*遠州作二重切花入。内箱蓋裏に遠州書付。『遠州蔵帳』所載。

補 清水の湧き出る状況において岩清水、苔清水などの言葉ある。ちなみに「岩」と「苔」は縁語。岩清水八幡宮は伊勢神宮・賀茂神社とあわせて三社に数えられる。男山・岩清水八幡に関わる謡曲には『弓八幡』『放生川』『女郎花』

がある。夏の涼の伝わる銘である。

【いりふね】入船 イリフネ

① 港に入ってくる船。

② 釣花入の生け方のひとつ。出船、入船、泊船の形式がある。

季 ①②無季

同・帰帆

類・矢橋帰帆

連・出船・泊船・八景

文・越前の国敦賀の湊は、毎日の入船、判金壺枚鳴らしの上米ありといへり。

淀川の川舟の運上にかはらず。万事の問丸、繁昌の所なり。

『日本永代蔵』巻四より

補 矢橋帰帆は近江八景のひとつ。釣花入は現在では夏に多く用いられるが必ずしも夏に限ることはない。古い会記には四季を通して見られる。床天上の幅を三つに分けた下座側の地点から吊る。その場合、横物の掛物は文字と花が横一列に並ぶので、掛花入同様避けたほうがよい。船形釣花入ならば舳先を軸側に向けるのが基本である。入れ方に様々な工夫があるが蔓を花入の底より低く垂らして櫂に見立てるのも面白い。やや大振の葉を帆に見立て出舟を模ったり、小振りの葉を低くし帆を降ろした入船に模ったり、吊らずに薄板に置いて泊舟とする生け方もある。これらの生け方は生花の流派より興りいつの時代からか茶花に応用したものと思われる。暮れゆく夕陽に照らされる漁港の風情を伝える銘。【はつけい】八景 参照。

【うかひ】鵜飼 ウカイ

① 鵜を使って川魚、特に鮎を捕る漁法。岐阜県長良川が有名。

② ①を職とする人。

③ 能の曲名。五番目物。鬼物。世阿弥改作。鬼物。旅の僧が鵜使に殺生をいましめ、仏事供養の功德を説く話。甲斐国石和川を舞台とする。面は前ジテ
|| 朝倉尉・笑尉・三光尉、後ジテ || 小癒見。

季 ①②③夏

同・鵜使い・鵜匠

類・鵜松明・鵜飼火・鵜篝

連・鮎・法華経・清流・松明・篝火

曲・すでにこの夜も更け過ぎて 鵜使ふ頃にもなりしかば いざ業力の鵜を使は
ん
『鵜飼』より

歌・年のはに鮎し走らばさきたがは辟田川鵜八つ潜けて川瀬尋ねむ

『万葉集』 大伴家持

・大井川かがりさし行く鵜飼舟いく瀬に夏の夜をあかすらむ

『新古今集』 藤原俊成

例*《鮎籠》鵜飼に用いる籠を見立てたといわれる花入。地方により形式を異にする。*《桂籠》「鮎籠」の一種。利休好。利休が桂川で漁師から譲り受けた魚籠といわれている。香雪美術館蔵。*《鵜籠》淡々斎好。鵜を入れる籠を模した菓子器。

補《桂籠》は少庵、宗旦、宗徧と伝えられた。赤穂義士吉良邸討入り当日、この花入は前日の茶会のため吉良亭にあった。義士は吉良の首奪還の追手に備え、桂籠を布に包み槍に掲げて首に偽装し泉岳寺まで引き上げたという。本歌といわれる香雪美術館蔵の《桂籠》には正面腰の辺に傷跡があり、このときの槍跡という。この伝えにより《桂籠》は夏に限らず師走にも頻繁に使われる。

【うきくさ】 浮草 ウキクサ

① ウキクサ科の総称。多年草。池、沼、水田などの水面に浮かび根を水中に垂らし生息する草。秋になると冬芽が水底に沈み春再び水面に浮かび殖える。
② 根がないため不安定な様、定めなきもの、はかなきものの喩え。「定」「根」「憂き」にかける。

季 ①春 夏 ②無季

同・萍うきくさ・根無草・たねなし・かがみぐさ・かきものぐさ・紫萍・田字草

類・青萍・濃萍・品字藻

連・定さだめ

歌・水の面におふる五月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ

『古今集』 凡河内躬恒

・わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

『古今集』小野小町

・浮き草の一葉なりとも磯がくれ思ひなかけそ沖つ白波

『新古今集』寂然

句・うき草を吹きあつめてや花むしろ 与謝蕪村

・萍や池の真中に生ひ初むる 正岡子規

補 「浮く」は水中、空中を漂う様をいうが、それ故根のない、定のない、はかない、不安定なものを連想させる。「浮き橋」「浮き舟」も同様である。また、「浮き」は「憂き」と同音語であるところから仏教的なこの世の辛さを感じさせる言葉であったが、近世に至って享樂主義的発想により「浮き」は明るく、楽しい現世、さらには色好的意味をも匂わせるようになった。「萍」は夏の季語。「萍生ひ初む」は春の季語。

【うきぶね】浮舟 ウキフネ

① 波に漂う舟。

② 頼る人もいない境遇。孤独な人生のたとえ。

③ 紫式部『源氏物語』巻五一の巻名。薫二十七歳の春。浮舟は薫中将が宇治に隠し置く女性であったが、ある日の夕暮れ匂宮の目にとまる。彼女の居場所をつきとめた匂宮は薫を装って浮舟の寝所に入る。浮舟は匂宮の情熱的な心に心揺らぎ、既に取り返しがつかない事態に恐れおののく。薫は彼女を都へ連れてこようとするが、匂君もわがものとしようとする。そして両者の使者が宇治の邸で偶然鉢合わせとなり浮舟は匂君との秘密を薫に知られてしまう。両者の間で苦悩は深まり、思い余った浮舟は死を決意する。

④ 能の曲名。四番組物。執心女物。横尾元久作詞。世阿弥作曲。四番組物。執心女物。③を出典とする。旅の僧が宇治川の畔で柴積み舟を操る里の女に出会う。この女はかつてこの地で恋に苦しんで入水した浮舟の話を語り、物怪に憑かれた身であることを告げ救いを求める。読経する僧の前に浮舟の亡霊が現われ身の上を語る。面は後ジテⅡ孫次郎・増。

季 ①②④無季 ③春

類・小舟・柴舟・舟橋

連・宇治・雪乃島

曲・亡き影の絶えぬも同じ涙川 寄るべ定めぬ浮舟の 法の力を頼むなり

『浮舟』より

歌 たち花の小島の色は変らじをこの浮き舟ぞゆくへ知られぬ

『源氏物語』浮舟

補 浮草同様、浮舟は根のない不安定な状態であり、特にかよわい女性の心境を象徴する。

【うすらひ】 薄氷 ウスライ

① 冬になり張りかけた氷。

② 春先の解けかかった薄い氷。

季 ①冬 ②春

同・薄氷・残る氷

連・龍田川・淡雪

歌・龍田川もみじ葉閉づる薄氷渡らばそれも中や絶えなむ

『壬二集』藤原家隆

・見るままに冬は来にけり鴨のゐる入り江のみぎは薄こほりつつ

『新古今集』式子内親王

例*富山県石動の銘菓。糯米を薄い種煎餅にし、和三盆糖を塗ったもの。

補 江戸時代以前は①として用いられたが明治以降は②の場合が多い。割れやすいことから「はかなし」「さだめなし」のたとえとして用いられることもある。

【うせざらむはな】 不失花 ウセザラムハナ

① 枯れない花の意。「うす」は失ふと同義。死ぬ。消え去るの意。

② 世阿弥が『風姿花伝』以下の書物に説いた能楽用語。優れた芸を評価する語。

季 ①②無季

同・まことの花・老木の花

文・もし、この頃まで失せざらむ花こそまことの花にてあるべけれ。それは、五十近くまで失せざらむ花をもちたる為手ならば、四十以前に天下の名望を得つべし。

『風姿花伝』より

・三十以前の時分の花なれば(中略)勝事あり。さりながら様あり、五十以来まで、花の失せざらむ為手(シテ)には、いかなる若き花なりとも、勝つ事有まじ。

『八帖花伝書』

補②の「花」は世阿弥の芸能論の主題である。「花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり」というから、花とは表現の面白さ、美しさ、見る人の心に訴える驚き、芸の多様さなどを意味する言葉と解釈できる。「花こそが芸の命」と位置付け各論で繰り返し説く。先載は、世阿弥が年齢に応じた芸のあり方を語ったもの。芸人は芸が未熟でも若ければ人目を引き人気を集めることができるのではないか、という問いに対し、経験の浅い若い芸人の人を「時分の花」とし、円熟した芸こそ「まことの花」「不失花」「老木の花」であると答えている。芸道に限らず人生の道標ともなる意味深い銘である。

【うつせみ】空蟬 ウツセミ

① 蟬の抜けがら。転じて単に蟬のこと。

② 「命」「人」「世」むなしきの枕詞。

③ 「現人」と同音で、この世の人という同義を兼ね現す。

④ 紫式部『源氏物語』卷三の卷名。源氏十七歳。源氏は空蟬に心を奪われ再び三条京極中川を訪れるが、空蟬は会おうとはしない。源氏は意に反しながらも軒端萩と共に過ごす。

⑤ 能の曲名。三番目物。本鬘物。京の三条京極中川を舞台とする。④の内容を題材に、旅の僧が空蟬の亡霊と出会う。源氏との恋を語る空蟬の亡霊は僧に回向を受け夜明けとともに消えていく。宝生流の番外曲。

季 ①夏 ②③無季④夏 ⑤秋

同・現人・現人

連・はかなさ

文・うつせみの世のはかなさも忘れはてては、千歳経む。君が禊を祈りてぞ書き流しやる川瀬にもかたへ涼しき風の音におどろかれても…

『栄花物語』卷九より

歌・うつそみの人にある我や明日よりは二上山を兄弟とわが見む

『万葉集』大来皇女

・うつせみの命を惜しみ波にぬれ伊良胡の島の玉藻刈り食む

『万葉集』麻統王 をみのおほきみ

・空蟬は殻を見つとも慰めつ深草の山煙だに立て

『古今集』勝延

補 古くは「現し臣」であり、そこから「現そ身」「現せ身」となった。この世の生きている人、この世の意味だが、この世をはかないもの、無常なも、虚しいものと捉えて短命の蟬の抜けがら空蟬の字を当てるようになった。

【うづみび】 埋火 ウズミビ

① 炉や火鉢の火が不要の間、火持ちをよくするため火種の炭を灰で覆っておくこと。

季 ①冬

同 いけ火・いけ炭・螢火

類 炉火

連 除夜釜・大福茶

文 例のまぎらはしには、御手水召しておこなひし給。埋みたる火起こし出でて、御火をけまゐらす。

『源氏物語』幻より

歌 埋火のあたりは春の心地して散り来る雪を花とこそ見れ

『後拾遺集』素意

・埋火の下にこがれしときよりもかく憎まるるをりぞわびしき

『和漢朗詠集』在原業平

・埋火のあたりは冬の草枕もえいづる春の景色なるかな

『熊野懷紙』藤原範光

例 *小堀篷雪作共筒茶杓。「年くるるあり明の空の月影にほのかにのこるよひのうづみ火」の自作と思われる歌銘による。 *名物灰被天目茶碗。小堀宗中箱書命銘。小堀家から諸家を移り岩崎家の蔵となる。

補 茶家では不時の客にも対応できるよう常に埋火を残し常釜をかけ助炭をするのが心得とされている。必要により灰を掘るとまっ赤な炭が顔を出す。また茶家では除夜釜の残り火に炭(輪胴)を足し埋火にして年を越す。この火が年明け若水による元旦の大福茶の下火となる。先載の範光の歌は『熊野懷

紙』の中で題は「旅宿埋火」である。

【えびら】 箆 エビラ

① 矢を挿し入れて背に負う武具。
② 能の曲名。二番目物。修羅物。旅の僧が須磨の生田川で梅を眺めている男に出会う。僧の問いに男はこの梅は生田の森の合戦（一の谷の合戦）の折り梶原源太景季が箆に挿した箆の梅と呼ばれる梅であることを語る。景季の武勲を語るこの男は景季の霊であることを告げ消える。武者姿の景季の霊が現われ合戦の様を再現し回向を頼み暁と共に消える。面は後ジテ＝平太。

季 ①無季 ②春

類・胡籙やなくひ・鞞ゆき・鞞ゆき

連・武者・端午・梅・忠度

文・沖には平家。ふなばたをたたいて感じたり、陸には源氏、えびらをたたいてどよめきけり。
『平家物語』巻第十一より

例* 《色絵箆花入》箆形の清閑寺焼花入。滴翠美術館蔵。

補 一般に箆は武士の具で、胡籙やなくひは朝廷の儀式・神事での具とし区別されている。本来胡籙は矢を納める皆具をいい、箆はその内の矢の容器であったようだ。箆花入は菖蒲、梅などを入れれば趣向の茶が楽しめる。

【えびし】 烏帽子 エボシ・エボウシ

① 元服した成人男子のかぶり物。羅・紗・紙などを素材に漆をひき、袋状に仕立てたもの。天武十三年朝服に規定された圭冠が原形。古くは礼装の頭巾であったが平安中期以降貴族は在宅でも常用し、庶民は外出の装いとした。

季 ①無季

同・圭冠はしはかうぶち

類・立烏帽子・風折――梨子打――親――折

連・元服・牛若・松風・水無月祓・烏帽子桜・端午

例* 《烏帽子桶水指》烏帽子箱に似ていることから名付けられた。備前焼が多い。『松屋会記』寛永四年に「エホシ箱水指」の名が見られる。* 《烏帽子香合》燕庵名物。信楽焼香合。秀吉・利休・藪内劍仲と伝えられた。* 《烏烏帽子香合》交趾型物香合。番付東三段十三位。* 《万歳烏帽子香合》染付型

物香合。番付西四段十七位。*《烏帽子棗》帽子棗・帽子茶器の別名。相阿弥好・紹紹鷗好等がある。*《風折》黒楽茶碗。長次郎造。宗旦銘。宗徧箱書。胴にくびれのある筒形が風折烏帽子に似るためついた銘。

補能の扮装の一部として烏帽子の類は冠・頭巾の類とともに使用頻度が高い。中には単なる扮装に止まらず、『松風』『柏崎』のように連れ合いの形見として扱われるほか『烏帽子折』『水無月祓』等、話の筋に重要な役割を荷なうこともある。烏帽子姿が印象的な能楽はこの他にも『翁』『巴』『一人静』『道成寺』『百万』『水無月祓』『卒都婆小町』『三輪』『自然居士』等々数限りない。烏帽子の種類は時代・身分・用途により異なり多様である。ちなみに『烏帽子折』にあるように武家の烏帽子は頂辺の左折が源氏、右折が平家と家系によっても型が異なる。

【おймаつ】老松 オイマツ

- ① 長く生息して堂々とした松。
- ② 能舞台の正面奥の後座の鏡板に描かれた松の絵。
- ③ 能の曲名。脇能物。老神物。世阿弥作。老神物。『北野天神縁起』に基づく菅原道真の飛梅伝説を典拠にしたもの。謡曲では道真伝より祝言能の性格が強い。この場合、老松は君の自世を守る長寿の象徴としての松のほか、主人を慕い都から筑紫安楽寺まで飛んだ梅をさらに後から追う「追い松」としての意味を持つ。面は・前ジテⅡ小牛尉・後ジテⅡ皴尉。

季 ①②無季 ③春

類・常盤木

連・羽衣・紅梅殿・東風・道真・天満宮・飛梅・能舞台・千歳

曲・諸木の中に松梅は殊に天神のご自愛にて紅梅殿も老松もみな末社と現じ給へり
『老松』より

歌・東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな

『拾遺集』菅原道真

例*《老松割蓋茶器棗》覚々斎好。待庵横庭の松を材とし、蝶番付の割蓋に木地溜塗。*《老松棗》北野献茶の際、又妙斎が好まれる。折り撓め中棗。外は溜塗に金銀で松の蒔絵。内黒塗。十二代一閑造。*《老松皆具》又妙斎

好。釜は姥口切合せ。風炉・水指・杓立・建水・蓋置は真鍮の老松彫。火箸は真鍮八角で銀玉頭。浄益造。なお、又妙斎斎百五十回忌に円能斎が写したものは一部意匠を異にする。*黒茶碗。小森松庵作。数寄者として茶杓削り、作陶に才のあつた松庵の最高傑作といわれる茶碗。加茂川石の黒がすばらしく高台には釉薬をかけず土を見せ、自ら名の一字を入れて銘としたもの。

補 松は常緑樹であることから神の依代とされ、不老長寿の象徴として崇められてきた。因縁故事来歴を持つ松は各地に多い。また、松は古くからの画題であるが、大振りの松の幹や枝を近景に捉え、障屏の画面いっぱいダイナミックに描く絵画様式は桃山時代の絵師狩野永徳から始まる。菅原道真に多少なりとも関わる謡曲は『老松』の他『雷電』『藍染川』『道明寺』『輪蔵』『右近』がある。梅、牛と取り合わせると謡曲『老松』の趣向となり、竹梅と取り合わせると祝賀となる。【こち】東風 参照。

【おきな】翁 オキナ

① 老人。長寿者。おじいさん。尊敬と親しみをこめた称。

② 能の曲名。謡曲の中でも最も有名な祝言舞で別格とされる。千歳・翁・三番叟からなり翁舞はその中心である。

③ 翁系の面の総称。翁（白肌色 笑顔）・三番叟（黒色 笑顔）・父尉（白肌色 吊目）・延命冠者の四面がある。延命冠者を除いて老人であり下顎を切り上顎と結んだいわゆる切顎に最大の特徴がある。

季 ①②③無季

同・式三番

類・千歳・三番叟

連・蓬萊山・長寿・不老・鳴滝・萬歳楽・蜀江錦・神楽

曲・千秋萬歳の喜びなれば、一舞舞はう萬歳楽 『翁』より

例*瀬戸破風窯茶入翁手本歌。中興名物。遠州の命銘。同手のものに「増鏡」がある。

補 翁は祝壽的であり別格の曲として神聖視されている。翁舞の原形はすでに平安時代末期の史料『弘安六年春日臨時祭礼記』に認められる。また、奈良市奈良坂町の奈良豆比古神社に受け継がれる翁舞（十月八日・町内翁講中によ

る奉納)は古式を今に伝え興味深い。

【おちば】 落葉 オチバ

① 散っていく木の葉。散り落ちた葉。

② 能の曲名。三番目物。本鬘物。洛北小野の里を舞台とする。旅の僧が小野の里にやつて来る。そこへ里の女が現れて落葉の宮の古宮に案内し、落葉の宮の霊であることを告げ姿を消す。その夜、僧の夢の中に落葉の宮の霊が現れ、夕霧の大将への思慕の念を語り、舞を舞う。僧の弔いを受けて時雨と散る落ち葉の中に姿を消す。金剛流の曲であるが宝生流、喜多流に同名の曲がある。面は孫次郎など。

季 ①冬 ②秋

連・木枯・落葉焚・一掻き・一籠・一衣・一時雨

漢・落葉

さんしゅう

きゅうろうまさ

なが

こうかい

あめしただ

ばんり

きやうあんいつ

あ

らくえふまどふか

ばんり

きやうあんいつ

あ

らくえふまどふか

ばんり

きやうあんいつ

あ

らくえふまどふか

『和漢朗詠集』より

愁賦 しゅうふ

文・もろかづらおち葉を何に拾ひけん、名はむつまじきかざしなれども…

『源氏物語』若菜下より

歌・かぎりあれば信夫の山のふもとにも落葉がうへの露ぞいろづく

『新古今集』源通光

・秋の夜の月の影こそ木の間より落葉衣と身にうつりけれ

『後撰集』よみ人知らず

・色やただこきもうすきもはてはては同じ落葉に木枯の風

『衆妙集』細川幽斎

句・落葉して遠くなりけり白の音 与謝蕪村

詩・かきねの かきねの まがりかど たきびだ たきびだ おちばたき

あたらうか あたらうよきたかぜびいぶう ふいている

異 聖歌『たき火』より

例*大名物唐物茶壺。柳営御物にも同銘の茶壺がある。

補 先載「秋の夜の…」にある「落葉衣」は着物の上に木の間より漏れる月の

光が落葉が散在しているように斑にみえる様、あるいは仙人の衣服をいう。季語では紅葉が秋であるのに対し落葉は冬に属する。炭を使わずに落葉や枯れ枝、薪で湯を沸かす野点をふすべ茶の湯という。「ふすべ」とは煙を立てるという意味の「ふすぶ」からきている。利休は松の枝に釜を吊り、松葉を掻き寄せてふすべ茶の湯をした。松風の音や煙の風情がすばらしく秀吉公も感心したと『南方録』や『閑夜茶話』は伝えている。『熊野懷紙』の題に「遠山落葉」があり六首現存する。

【おとしぶみ】 落し文 オトシブミ

① 誰のしわざかわからないように落しておく手紙。落書。

② 甲虫の一種に栗、檜、櫟などの葉を筒状に巻いてその中に産卵するものがある。この葉が地に落ちたものを落し文と言う。この甲虫そのものを落し文と呼ぶこともある。

季 ①無季 ②夏

同・落書

類・鶯の落し文・時鳥の落し文

連・時鳥・鶯

例 ＊木の葉を巻いた形の菓子。青く染めた葉形のこなしを折り中に餡を挟んだもの。

補 落し文は政治的批判を歌の形に仕立てたもの、告げ口の手紙、相手に名は告げるものの第三者には文通の事実を知らせない恋文などの場合がある。茶の湯では季節感をとる②の虫の産卵した葉を意味することが多い。鶯の落し文、時鳥の落し文などの言葉は実際には鶯や時鳥とは何の関わりもないが、鳥の仕業と空想した結果である。

【おぼろづき】 朧月 オボロヅキ

① 霞がかかりおぼろに見える月。

季 ①春

同・春の夜の月・淡月

類・朧夜・鐘朧・朧月夜

連・霞衣・花曇・夜桜・花宴

曲・曇りも果てぬ春の夜の 朧月夜にしくものもなき海士の苦

『八島』より

歌・照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

『新古今集』大江千里

句・おぼる夜のかたまりとしてものおもふ

加藤楸邨

詩・おぼる月夜 高野辰之

菜の花畑に入日薄れ 見わたす山の端 霞深し 春風そよ吹く 空を見れば
夕月かかりて にほひ淡し

里わの火影も 森の色も 田中の小路をたどる人も 蛙のなくねも 鐘の音も
さながら霞める おぼる月夜

例 *愛知県一宮市の菓子。小麦粉に水飴を溶かし鉄板で焼いたもの。

補・春の季語としておなじみの霞・朧は気象学用語にはなく、現代気象学では一年を通じて霧・靄もやという言葉を使う。水平方向の見通しが1km未満のときは霧、1km以上見通せる薄い霧を靄もやという。文学の世界では季語として霞は春、霧は秋に限定される。霞は日中だけに限られ、夜の霞は朧おぼろという。そもそも朧とは、ぼうつとしてはつきりしない状態をいう。遠く幽かに聞こえる鐘の音を鐘朧おぼろといい、視覚に限るものではない。朧に関連した朧月、朧月夜は当然春の季語に属する。その他、同義の歌語に「かすめる月」「おぼるなる雲月夜」などが平安時代から見られる。月は美を語るにあたり喩えの材になりやすい。有名な「月も雲間のなきは嫌にて候」という言葉は『禅鳳雑談』に記された村田珠光の言葉だが、完全主義的な唐物の美に対する侘茶の美学を端的に言い表している。くつきりと見える秋の月と朧月との対比を喩えにした名言だ。「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものは。雨に對ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行くへ知らぬも、なほ、あはれに情深し」『徒然草』第一三七段にも相通じる美学がある。【かすみ】霞 参照。

【おみづとり】御水取 オミズトリ

① 東大寺二月堂の修しゅにえ二会の一部。修二会は天平勝宝四年(753)実忠和尚が柳生の北、木津川南の笠置山の竜穴で見た菩薩の行法を模したものとされている。旧暦二月に行われたので修二会という。現在は三月に行う。

季 ①春

同・修二月会

類・過去帳・走りの行法・達陀だつたん

連・若狭井わかさい・関伽井屋あかい・火の粉おたいまつ・御松明

歌・時雨して奈良はさむけれ御水取なほ二月堂に行を終わらざる

中村憲吉

句・水とりや氷の僧の杵の音

松尾芭蕉

補修二会は過去帳 走りの行法・お水取り・達陀だつたんよりなりこれを総称してお水取りということもある。二月堂下の関伽井屋あかいから水を汲み本尊おたいまつに供えることからこの名がついた。二月堂の舞台を大松明を持って翔ける御松明は壯観。松明の火の粉は厄除けになるといわれ。現代でも数万人の人出がある。関西ではこの御松明の行事が終わると春がやってくるといわれている。

【おもかげ】 面影 オモカゲ

① 現実にはない人の姿が近くに見える幻。

② ある近親者に似た風貌、所作。特に親の顔立ち、しぐさが偲ばれる子の姿。

③ 鏡に映った顔。

季 ①②③無季

連・面影川

歌・高円の野辺のかほ花面影に見えつつ妹は忘れかねつも

『万葉集』 大伴家持

・夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば

『古今集』 伊勢

・隔てゆくよよの面影かきくらし雪とふりぬる年のくれかな

『新古今集』 俊成女

・面影のわすらるまじき別れかななごりを人の月にとどめて

『新古今集』 西行

例*中興名物瀬戸真中古窯茶入。同手本歌の「野田」が焼失したため野田手本歌となる。藤田美術館蔵。*名物瀬戸金華山窯滝浪手茶入。遠州箱書。*黒楽茶碗。長次郎造。箱書は山田宗徧。楽美術館蔵。

補 面影川は京都市内を流れる堀川の異名。